

異文化理解における 日本人学生と留学生の意識

—ワークショップからの事例をもとに—

栗山昌子

1. はじめに

日本の大学や専門学校で学ぶ外国人留学生は、2001年5月で78,812人に達した。(文部科学省調査) これは、「留学生10万人構想」の答申が1983年になされて以来、順調に伸びてきた人数である。各大学は積極的に留学生を受け入れてきたわけであるが、数の増加と平行して、当然、大学内での教育のあり方も問われることになる。

本学でも従来毎年2, 3名の留学生を受け入れてきたが、2002年度には日本語学校修了後、学部に入學した外国人留学生に加えて、新しく姉妹校の大連外国語学院から5名の交換留学生を受け入れることになり、本学在籍の留学生の総数は現在23名となった。これは全学生数の約1%に当たるが、日本人学生と席を並べて講義や演習の授業に取り組んでいる。

留学生受け入れは、国の方針であるが、大学での教育内容に関しては各大学に任せられているのが現状である。大学は留学生の数を増やすことだけではなく、大学内での教育の内容に関しても十分な対応が必要とされている。学問を目的に日本に留学してきた留学生に専門に関する講義科目や、研究の場を提供すると同時に、彼らが本来の目的を達成するための学生生活におけ

る環境の整備，生活面や精神的な面に関する理解や支援にも心を配ることは受け入れた大学の義務でもある。また，当然のことながら大多数である日本人学生側の留学生受け入れに対する理解と相互の交流，異文化理解，国際理解の積極的参加が望まれる。日本の大学に留学している留学生は日本の大学で学ぶことが第一の目的ではあるが，ほとんどが日本人学生と交流したいという強い希望を持っている。特に短期で留学してくる交換留学生に関しては，その滞在期間（1年間）の間に彼らが送るキャンパスライフで同年代の日本人学生と十分に交わり，日本文化や現代の生きた日本事情などを吸収して帰国できるようにしなければならない。姉妹校協定のもとに来日した交換留学生は日本滞在時間も限られており，1年というのはやっと日本に慣れる期間である。大学側が十分に対応する必要があると思われる。

留学生を受け入れた以上，大学というコミュニティーで学ぶ留学生と受け入れ側とのよりよい共生が望まれるわけであるが，その共生のために大学側はどのような場を提供しているのであろうか。圧倒的にマイノリティーである留学生がマジョリティーの日本人学生の中にどのように受け入れられ共生していくかということは，大きな課題である。大学は教育の場で何か具体的な方策を講じる必要がある。また，マイノリティーはマジョリティーの中に入った時に，マジョリティーに包括されていくのではなく，お互いに存在を認め合い同等の立場に立って学び，思考し，行動することが望ましく，それが真の意味での共生である。

以上のような理念に立ち，留学生と日本人学生の共生，相互教育の場を提供することを目標とし，異文化理解のワークショップを試みた。これは大学の教科の中でのワークショップの形態に積極的に取り組もうという教育方針からの試みでもある。

本論では，ワークショップにおける学生の活動を個々の事例に基づいて分析し，ワークショップのあり方とその効果について検討し，今後の課題について述べる。

2. ワークショップの概要

2-1 ワークショップの目標

最近、学校教育の現場でも参加体験型、双方向性を特徴とする新しい学びと創造のスタイルのワークショップという形態の活動が注目を集めている。大学の教科の中にも積極的に取り入れて、その効果的な教育が期待されている。先生や講師から一方的に計画された講義を聞いたり、テキストに従って知識を得るというものではなく、実際にそのことをやってみて、体験してみようという「体験」を重視した学び方である。また、教師も学生も一緒に参加して、計画していこうという参加型の合意形成や計画の手法を用い、参加者同士がお互いに語り合い学び合う、双方向の学び方である。これは、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけでなく体や心を使って体験することによって、相互に刺激しあい、学びあうグループによる学びと創造の方法として欧米から世界中に広がってきた活動である。

ワークショップの目的の一つは、人と人との間関係を豊かにすることでもあり、現代社会の課題であるコミュニケーションとも通じるものである。個人にとっては、積極的に参加することにより、自分なりの可能性を見出す機会が与えられ、自己実現の機会となる。これは、個人の問題だけではなく個人の成熟を基盤にした、実り豊かな社会を創り出していくことにも繋がる。また、ワークショップには、人と人が直接に出会う喜びがあり、人を通して自分に出会う喜びがある。

異文化理解のワークショップではそれぞれの文化背景の異なる外国人同士が出会い、単に異文化を語るのではなく、交わりの中で、行動の中で、互いに感じ合い、体験の中から自ら学んでいくことを目標としている。知識として知ることよりも感じることの方がはるかに重要であるという基盤に立てば、異文化理解の理念は、実際に触れる、体験するということに重点をおく意味でワークショップの形態に最も適している。

本学の留学生は、外国人留学生対象の日本語の授業の他に、日本人学生と

席を並べて一般の授業を受けてはいるが、実際にはなかなか日本人学生と交わる機会がないということが問題であった。留学生の話によると、よほど積極的に日本人学生に話しかけない限り日本人学生との交流は難しいとのことである。勿論、日本人学生の中には留学生に興味を示し積極的に話しかけたりする者もいるが、それはほんの僅かの限られた学生である。日本人学生は留学生に対して無関心であるという訳ではない。ただ、日本人の性格的なものによると思われるが、異なるもの、自分の所属でないものに対する臆病さに起因しているようである。この日本人学生の非積極性を打開し、目を覚ます意味でもこのワークショップの開講価値はあるのではないだろうか。

2-2 ワークショップの構成と形態

外国人留学生は本学の全学生数の約1%で絶対的なマイノリティーである。しかし、ワークショップでは、留学生と日本人学生を同数にしたいということと、学年も1年から4年まで偏らない学年を希望していたが、結果的には幸いにも下記のような構成となった。

留学生	12名	中国人	10名 (短期交換留学生 5名)	
		韓国人	2名	
			アフリカからの特待生を加えると13名になる	
日本人学生	13名	4年生	2名	
		3年生	2名	
		2年生	3名	
		1年生	6名	合計25名

前期の期間中に行った活動プログラムは、第2回目の親睦餃子パーティー終了時にアンケートで各自の希望を取ってその結果に従って作成したものである(表3参照)。従って、それぞれの活動内容は、参加学生の希望に基づいてでき上がったシラバスである。これは学年初めに授業概要で提示されるいわゆる先行シラバスとは異なり、後行シラバスと呼ばれるものになる。授

業の初めに具体的に何をどのように学ぶのかというシラバスをあらかじめ提示するのではなく、まず実践を行い、活動の中で学んだことがシラバスとなるわけである。言語教育では、タスクシラバスがその代表的なものとして行われている。タスクシラバスでは、実際の現場に出かけて行き、そこで各自の目標を達成するために行った言語活動が学習項目となるもので、実用的な面が高く評価されている。

2-3 ワークショップのためのアンケート調査

第一回目のオリエンテーション時の自己紹介では、単に自分の名前と出身国にとどまり、それ以上のコミュニケーションができなかった。全員が親睦を兼ねた活動を望んだため、第2回目の活動は中国の親睦の食を代表する餃子作りを行った。終了後アンケートを行った（表1-1、表1-2）が、当日の親睦餃子パーティーの活動に関しては、日本人学生と留学生が一緒になってわいわい話しながら餃子を皮から作り、交流できたことに対する満足感を留学生と日本人学生の全員が示し、圧倒的な良い評価であった。日本人学生は、初めて皮から作る過程を共同作業によって体験し、その過程を細かに説明し、指示してくれる留学生の日本語の流暢さに感心している。（後述）

表1-1 ワークショップ活動希望調査 アンケート

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. ワークショップでこれからやりたいこと、知りたいことについて書いてください。2. ワークショップで自分ができること、紹介できるものを書いてください。 |
|---|

表1-2 「餃子を作る」親睦会に参加してのコメント

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①餃子を作る作業の中であなたはどの過程をやりましたか。②一人で餃子を作れるようになりましたか。③味はどうでしたか。④参加者の何人と話しましたか。⑤覚えている人の名前を書いてください。⑥親睦会「一緒に餃子を作る」についてコメントおよび感想を書いてください。 |
|--|

2-4 アンケート結果とワークショップ活動の内容

下記の表2-1と表2-2は表1-1で①ワークショップでやりたいこと
②自分ができることを問うたアンケートの結果である。

表2-1 ワークショップでやりたいこと

*数字は多い順位

日本人学生	留学生
1. 一緒にお祭り, 花火大会に行く	1. 日本料理を作る
2. 留学生の国の言葉を学ぶ	2. 日本の伝統文化を学ぶ
3. 意見交換 (考え方の相違など)	3. 着物の着方
4. 留学生の国の料理を作る	4. 意見交換 (日本人の考え方や若者の意識)
5. 留学生の国の文化を学ぶ	5. 日本の祭りや風俗習慣を学ぶ
6. 日本文化について話し合う	6. 名所, 遺跡について学び, 実際に行く
7. 一緒に各国の歌を歌う	7. カラオケ

表2-2 ワークショップで自分ができること

日本人学生	留学生
1. 簡単な日本料理を教える	1. 言葉を教える
2. 日本の歌を歌う	2. 料理を教える
3. 地域の紹介	3. 国の歌紹介・中国の詩の暗誦
	4. 国の文化紹介 (中国の茶道)
	5. 地域紹介・観光案内

上記の表2の結果をそのまま取り入れてでき上がったのが表3のワークショップの活動内容である。それぞれの活動にその活動を希望する学生をファシリテーターとして決めた。毎回の活動はその担当であるファシリテーターが自分で担当の活動を立案, 準備をして活動のリーダー役を務めた。

表3 異文化理解ワークショップ活動内容

回数	期日	活動テーマ	場所	ファシリテーター(協力者)
1	4/17	オリエンテーション 自己紹介	教室	国際交流専門家(協力者) 担当教員

異文化理解における日本人学生と留学生の意識（栗山）

2	4/24	親睦会 get together party 中国の食文化（餃子を作る）	留学生 宿舎	中国人留学生 （交換留学生中心） 全員参加
3	5/1	国の紹介1 アフリカについて	教 室	アフリカ人留学生（特待生） *留学生どんたく参加呼び かけ
4	5/8	国の紹介2 中国について	教 室	中国人学生（4年生）
5	5/15	国の紹介3 韓国について	教 室	韓国人学生（3年生）
6	5/22	日本の食文化 日本料理作り すし・お吸い物・白玉だんご	調理室	料理専門家（協力者）
7	5/29	日本文化紹介 日本の民話「花咲か爺さん」	教 室	日本人学生（3年生）
8	6/5	意見交換 ディスカッション 考え方の相違，若者の意識	教 室	日本人学生（4年生）
9	6/12	日本の着物 着方を学ぶ 着物を着てみる 着物の歴史	教 室	着付け専門家（協力者） 日本人学生（2年生）
10	6/19	日本の名所訪問 大宰府天満宮	教室外 活動	日本人学生（1年生）
11	6/26	中国の民話 七夕の由来 寸劇	教 室	中国人学生（交換留学生） 中国人学生 （4年生・3年生）
12	7/3	韓国の歌・中国の歌と民話 一緒に歌おう	教 室	韓国人学生（2年生） 中国人学生（2年生）
13	7/10	福岡の祭り紹介 博多山笠 花火大会予告 一緒に行こう	教 室	日本人学生（1年生） 日本人学生（2年生）
14	7/17	各国の歌を歌おう 修了お茶会	留学生 宿舎	日本人学生（2年生）
15	7/24	レポート提出		

上記表3のシラバスにしたがって14回のワークショップが順調に行われ、最後に課題レポートの提出で前期のワークショップを修了した。

修了時にフィードバックとして、以下の点についてアンケートを行った。

1. 良かった点
2. 改良すべき点

3. プログラムとして他にやりたかったこと

4. 各活動の評価

◎大変よかった ○よかった △まあまあ ×よくなかった

表4 ワークショップ活動の評価

	活動内容	評価		活動内容	評価
1	オリエンテーション	A	8	意見交換（異文化理解）	C
2	親睦餃子パーティー	AA	9	着物の着方	A
3	アフリカについて	A	10	大宰府見学	B
4	中国について	A	11	中国の民話（七夕の由来）	AA
5	韓国について	B	12	中国の歌と民話・韓国の歌	B
6	日本料理（ちらし寿司）	AA	13	山笠紹介・花火大会お誘い	B
7	日本の民話（花咲か爺さん）	C	14	各国の歌と修了お茶会	A

評価の基準については個人差があり、全体的に高い評価をする者とそうでない者の差があるため、◎○△×を点数化して統計した結果の総合点を下記のように表した。

AA (90~100), A (80~89), B (70~79), C (60~69)

修了レポートの課題は次の3つの中から1つを選んで提出することにした。

修了レポート課題

- ①これまでに異文化衝突（カルチャーショック）を感じた点，または異文化接触において疑問に感じたこと，それに自分はどうか対処してきたか，また，どのように解決してきたか，それとも未解決のままかについて述べる。
- ②興味を持った新聞記事，雑誌記事，またはテレビ番組や報道について自分の所見を述べる。（資料は添付，または概要を書き，期日，出典，を明記する）
- ③ワークショップにおいて学んだ点，感じたこと，ワークショップと自分との関わりについて述べる。

3. 活動の分析と考察

ワークショップの活動を分析するにあたって、個々の活動を取り上げ、内容を検討していく。検討は参加学生の評価、および修了レポート課題③に基づいて行い、ワークショップの活動の問題点と学生の異文化に関する意識について考察する。学生の感想やコメントは原文のまま掲載した。

参加学生全員25名を日本人学生：N-1～N-13、留学生 R-1～R-12とし、引用文の文末に記した。

3-1 オリエンテーション

オリエンテーションにおいては、ワークショップの形態での教科は今回初めての試みであること、外国人留学生と日本人留学生が同じ大学で席を並べて学ぶことの意味、国際化を目指す社会における異文化接触に対する意識等について共に考える場を提供することを述べた。このワークショップは、異文化交流の場を持ち、お互いを知り、理解し合うことを目標としていることを中心にしている。また国際化、異文化共生の時代といわれる現代社会に生きていくうえで、グローバルな視野を持つ人格を養成することも兼ねている。授業のやり方は、学生主導で参加学生全員で計画し、進めていくことでの了解を得た。幸い、中国人、韓国人、それに加えてアフリカからの特別留学生にも賛助参加してもらうことができた。また、通常は大多数の日本人の中にいる留学生も授業ではアフリカ留学生を加えると受講者数が日本人学生と同数であることも交流の場としては活動面で効果が期待できると思われた。

第1回のワークショップでは、国際交流の松尾さんによる異文化に関するエピソードを含めた話の後、自己紹介をして次回は親睦餃子パーティーをすることに決定。材料の購入から準備全てを中国人の留学生全員に依頼した。

3-2 親睦餃子パーティー

餃子作成の準備は全て中国人留学生に依頼したが、場所をキャンパス内の

交換留学生の宿舎で行うことにしたため、実際には交換留学生5名が準備から担当することになった。交換留学生は4月に日本に来たばかりで日本滞在は初めての経験である。日本語は本国の大学で学んできており、日常会話には不自由ない。しかし、実際に日本の社会で生活し始めてから3週間不足であるため、スーパーでの材料の買い方、ラベルの読み方、安いものの見つけ方などもよい経験になった。実は、交換留学生は本国では寮生活をしており、食事は寮の食堂でとり、自分で料理を作ったという経験はほとんどない者ばかりであった。中国の事情では幼い時から全く男女平等のもとに教育されているため、女性だからといって料理ができるという訳ではない。特に、大学に進学している学生は寮生活で、勉強のみに集中し、あまり家事をやったことがなかったということである。日本に来て初めて食事を自分で作らなければならないという経験をしている。

親睦餃子パーティーは前述（表4参照）のように全員が大変よい評価をしている。楽しかった、友人ができた、異文化交流の発展が望めそうで楽しみだとワークショップへの期待が膨らんだようだ。また、留学生の中には「母が作ってくれた味みたいだったR-3」と書いたものもある。また同じく「こんなに多くの人と一緒にあって一緒に餃子を作って食べることは初めてです。皆さんの協力で中国の餃子を作ることを通じて、その協力の大切さを痛感しました。そしてその時、言葉の交流だけでなく、以心伝心の交流もあります。その友好の雰囲気が一番だと思いますR-2」とコメントしている。R-5は中国人にとって中国の餃子を日本人の学生が作ったことに感激している。留学生は全員が日本人学生との交わりを喜んでおり、「自分の懐かしい料理ができるし、日本人の友達もできたし、満足感でいっぱいですR-4」「たくさんの外国人の友達ができる場で、異文化の交流に貴重な機会だと思うR-6」などの感想を寄せている。

日本人学生のコメントには「自分の家で作る餃子と違って、皮から作ったのは初めてだった。皮（ピー）や具（シャ）を中国語で覚えたN-6」「とても楽しくて、みんなを知るいい機会だった。餃子の皮を伸ばして具を包む、

全て初めてのことだった。留学生が具の材料は何か、皮の伸ばし方、なぜそのような包み方をしなければならないのかということまで細かく日本語で説明してくれて、日本語の上手なことに感心したN-2]

一つの目的に向けて一緒に共同手作業をしながら話すということが共感をよんだようである。全員R-1が作った餃子の作り方のレシピをもらって、餃子作りの全工程を体験した者は自分で餃子を作れるようになったのではなかろうか。

3-3 国の紹介 アフリカ・中国・韓国

アフリカの紹介はケニアからの特別日本語研修留学生が行った。来日して6ヶ月であり、日本語能力は初級段階であるが、全ての説明を日本語で行った。自分で描いた絵や簡単な地図を用いて、アフリカの歴史や気候、食べ物、地理について、ごく初級の基礎的な日本語を使用して参加者全員に十分に理解させることができたのは、本人の持ち前のコミュニケーション能力によるものだと思われる。最後にアフリカでよく歌われる歌をスワヒリ語で教え、一緒に歌った。

中国や韓国に関してはそれぞれ、項目ごとに板書をしてかなり念入りに説明がなされた。国の面積、地理、人口、気候、歴史、政治、宗教、社会情勢、産物、食生活、国旗の意味などの説明が流暢な日本語でなされた。1年生の日本人学生は「日本の面積の25倍もある中国はすごく魅力があります。一番驚いたのは、人口が12~13億もあり、日本では子どもの数が減り続けて、もっと生まれればよいのにと思っているのに、隣の中国ではそれと正反対に一人っ子政策をしているということですN-10]

日本人学生が何よりも感嘆したのは、留学生が自分の国のことを堂々と日本語で詳しく説明したその知識と態度であるが、それに加えて自分たちの知らないような日本のことについてまで知っていたことである。「何も知らない自分が恥ずかしいと思わされた。というより、自分の中で知っているつもりでいたのだ。韓国、中国、ケニアと母国の歴史や、文化などを自信を持っ

て紹介している。それに、日本が母国である私たちが知らないことさえ日本について話していた。私はどれだけ日本のことを知っているのだろうか、本当に日本人と言えるのだろうか、と自分を疑ってしまった。大げさかも知れないが、私にとってこの時の衝撃はこれほど強かったのだ N-13」「私は留学生と自分の差を思い知らされました。たまに日本のことに触れた時、留学生は知っていて、私は自国のことなのに答えることができなかったということがあり、とても自分を恥ずかしく思いました N-2」「もっと母国である日本のことを知ろうと思った N-13」

日本人学生は自分たちがいかに日本のことを知らないかを思い知ったようである。

3-4 日本料理紹介

留学生の自国紹介が終わり、中国の食文化である餃子つくりの後には、日本料理紹介という活動になった。「自分ができること」のアンケート（表2-2参照）で日本人学生は簡単な日本料理を教えることをあげている。実際にどういう料理を教えられるかと聞くと「おにぎり」という返答であった。日本料理では「ちらし寿司」が希望にあがり、全員が作れる自信がなかった。そこで調理の専門家の西田先生にお願いして学内の調理室で行うことになった。時間の都合上材料の購入とある程度の下準備をしていただいて、当日は班に分かれて西田先生の指導のもとでの寿司作りが行われた。薄焼き卵の作り方等かなり専門的な指導を受けて全員の共同作業のもとで、散らし寿司、お吸い物、白玉団子のデザートが出来上がり、全員が満足であった。準備されたレシピをもとに日本料理の過程における基本的な心がけ等も学ぶことができたのは、留学生のみならず日本人学生にとっても収穫であった。ワークショップ修了時の評価では餃子パーティーと同じくAAの評価になっている。共に作り、共に食すという人間の最も基本的な活動に人間関係のよいコミュニケーションが機能するのかもしれない。ただ、日本人学生は自分たちが自信をもって紹介できる日本料理がないことに気づいた。ファーストフードで

済ませることに慣れている日本人学生はおにぎりすら自信をもって握れるかといえど全員がそうではない。ただ餃子パーティーの時に「おにぎり」を自分で作って持参してきた学生は「私はおにぎりを少し作っていったけれど、それを喜んで食べてくれて、とても嬉しかった。おにぎりの作り方を教えてくださいと言われた時、自分にも何かできるのだなと実感したN-6」と書いている。

3-5 日本の民話『花咲か爺さん』

留学生が知りたいことに日本文化をあげている。日本人学生が紹介できるものとして民話を取り上げることにした。学生は「花咲か爺さん」を紙芝居で紹介した。適当な教材が見当たらず自作の絵紙芝居であったが、民話に出てくる日本語が分かりにくいということで英語と日本語で説明をした。準備が不十分で日本人学生側からはあまりよい評価を得ていないが、同じような民話は中国にも韓国にもあるということが分かった。自分の国では、どういう風に違ふとかしばらく談話が続いた。言葉の中で2, 3質問がでたが、「しろ」というのが犬の名前であるということが最後まで分からなかったということである。日本人の間では、「しろ」や「ぼち」は民話に出てくる犬の名前だと当然のことに受け止めているが、留学生にとっては新しい発見であった。ペットの名前も時代によって変化しており、その時代を反映していることは間違いない。ペットには飼い主が好きな名前をつけているのだが、現代のペットで「しろ」や「ぼち」という名前を頂戴しているのは少ないだろう。ペットの名前の変遷を研究してみると面白いかもしれない。

3-6 異文化意見交換

日本人の考え方、若者の意識等については、留学生側の関心が高い。日本人学生も意見交換、考え方の相違などについて話し合いたいという希望はアンケートでも2位を占めていた。ワークショップ8回目となればお互いに知り合って、話し合える時期だと想定して設定した。日本人学生4年生の2名

が担当し、事前にどういうテーマについて話し合いたいかというアンケートをとった結果、一番多かったのが恋愛で、2番目が結婚であった。テーマを男女の交際ということでディスカッションが行なわれた。結果から言うと他の活動に比べて評価が最も低かったのであるが、ほとんどが恋愛や男女交際について興味を持っているにもかかわらず、なぜ活発な討論ができなかったのだろうか。学生たちがディスカッションに慣れていないことと、司会者も不慣れなことも起因していると思われるが、1コマ90分では問題が大きすぎてまとまらなかったということもある。いずれにしろ、結論が出ず中途半端に終わったことが不満を残した大きな原因だと思われる。

口火を切ったのは留学生 R-13で、アルバイト先の日本人の若い女性たちがパートナーを次々に替えて同棲しているが、そのあまりにも自由奔放な男女関係に驚いたということである。日本人の若者は一般にそうなのか、また、そのことをどう思っているかという疑問を投げかけた。結婚前にほとんどが同棲するのか、そしていやになったらやめるのか。デートの時に食事代はどちらが払うのか。中国人は結婚の前に同棲すると聞いたが本当なのか、韓国人はどうなのか、などの問題が次々に出てきた。日本人学生はほとんど自分から発言する者はいないので司会者が指名をすると、同棲に関しては他の人はどうだか分からないが自分の親は許さないと思う、という意見がほとんどであった。途中から中国人同士で中国語で大きな声で討議が始まった。内容は中国なので分かりにくかったが、一人の中国人留学生が言ったことに対してそうではないと反対意見が出て、お互いに自己の意見を主張して討論になったと思われる。恋愛観や結婚に関しては国の問題ではなく、それぞれ個人の問題なので日本人はどうだとか、中国人や韓国人はどうだとかは言えないということで一応の意見交換が終わった。

意見交換の活動に関してはレポートで次のようなコメントをしている。

「日本人は、中国人は、という風にみんな話をしていたけれど、実際日本人の中にもすぐに同棲をしない人もいれば、男性にお金を払ってもらうことを絶対に嫌う人や、二人でお金を出し合う人がいたり、それは国によって

違うのではなく、その人の恋愛に対しての価値観の問題だということが分かりました。とはいっても、価値観というものは生まれた国の生活環境なども大きく影響してくるものだと思います。現に、日本は今平和すぎるせいか、物事を真剣に考える人が少なくなっているような気がします。その点、中国や韓国では、自分をしっかり持って行動する人が多いと思いましたN-2] 「自分の意見を整理してみんなの前で発表することは、勇気のいることだと思った。話し合いをしている時に日本人学生は、お互いには話していないことに気づいた。中国や韓国の学生は一緒になって話していたけれど、日本人学生は自分の隣の友達としか話していなかったことに、私たちはみんなで話し合いに協力するという事に慣れていないと思った。そして、他の人の話しを聞くだけの受身の状態になっていると感じた。もっとオープンに自分の意見を発表すべきだったと反省したN-6] 「恋愛をテーマに話し合いをした時も、結局は国単位で見るのではなく恋愛は人それぞれだからという結果になってしまい、あまり話し合った意味がなかったような気がした。もし、日本人の一人が『私はこういう風な恋愛をする』と言ってしまったら、留学生が『日本人の恋愛はそういうものか』と思い込んでしまう恐れがあるN-5] 「人によっていろいろ違うから、これは私個人の意見ですと前置きや付け足しも見られたが、そうであれば「異文化」を前提とした話し合いではなく、単に個人の意見の交換になっていたN-5]

N-5の意見は現代の日本人学生の特徴的な点を現している。なぜ自信を持って自分の意見を述べないのか。自分が言ったことで、他の人がどう思うか、自分の意見が日本人全体の意見だと思われると困るという常に何かの規制の中に自分を置いている。勿論、恋愛は個人の問題で一般化できない。多くの日本人学生が個々の意見を述べ「私はこう思う」「私はこうだ」となれば、総体的に見て日本人でもそれぞれ意見が違うのだという結論が自ずと導き出せるはずである。今回のディスカッションでは、中国人や韓国人間での議論を見て、恋愛観は同国人同士でも違うから、個人によるということを実感するに至った。

討論のできない日本人とよく言われるが、個人の意見より日本人という立場の方が意識的に表面に出てくる。また、常に相手の気持ちや状況に気を配り、自分の意見より、自分の言った言葉の反響や自分の立場に気を使っていることが覗かれた。N-6の隣の友達としか話さなかったという状況は、自分の意見についての同意を求めたり、確認をしている場合が多い。その代表的な文末表現が若者たちの「～だよね」「～じゃない」に現れていると言える。

3-7 着物の着方

着物を着ている人は見たことがあるが、どうやって着るのか、また自分も着てみたいという希望は留学生から寄せられていた。日本人学生の中で着物を自分で着られる者は皆無であり、まして留学生に着物を着せることは不可能である。そこで着付けの先生にボランティアをお願いして、ワークショップの教室は着付けの教室にはや変わりした。時間がなくて同時にはできなかったが、着物の歴史についての発表と説明を行った。衣については、日本の着物だけではなく各国の民族衣装についての活動も必要であった。「日本の着物に関して言えば、日本では女性の年齢が20歳に近づくと、どこからともなく『着物を買いませんか』というダイレクトメールや葉書が必ず家に届くこと N-5」というようなことも情報として流し、家に来たパンフレットを配っていた。留学生の中には自分で買った浴衣を持参して着方を習って着た学生もいた。時間的な制限があり、留学生全員に着せることができなくて残念であった。

3-8 大宰府見学

課外授業や小旅行、みなでどこかへ一緒に行きたいという意見が双方から出されていた。時間的にも経済的にも制限があるため、アンケートの結果ワークショップの時間帯に大宰府行きが決行された。アルバイトなどで参加できなかった学生もいたが、計画した1年生の案内で17名（留学生8名、日本人学生9名）全体の7割が参加した。「大宰府天満宮ツアーもみな喜んでく

れて、説明を真剣に聞き、質問も多く受けた。みなが学ぼうとしている態度は素晴らしい。梅が枝もちを食べてちょっと一息つけた楽しい雰囲気であったN-13」時間的にも経済的にも余裕があればこのような小旅行は効果的である。

3-9 中国の民話『七夕の由来』

評価の高い活動の一つである。これは、交換留学生4名が日本語で七夕の由来を劇にして演じたのだが、素晴らしいパフォーマンスであった。ナレーションも留学生の先輩が行い、現代語を交えたユーモアもある彼女らのオリジナルの寸劇であり、拍手喝采であった。参加者全員が彼女らの実力に感動して高い評価点がつけられたことは間違いなく、全学生に披露したいほどのできばえであった。七夕の由来については、日本人学生も非常に曖昧な知識しか持っていない。学生の中には、七夕会館を持ち、七夕祭を祝う小郡市がその発祥の地であると信じていた者もあり、中国にも韓国にも同じ七夕があるということに驚いたということであった。「中国の民話で七夕の由来を中国人学生が完璧な日本語の劇で発表したのは印象的であった。紙に書いてそれを読むという発表ではなく、台詞を日本語で覚えていく、それを動きで表現することは難しかっただろうが、とても分かりやすく楽しく劇をしていたので、すごく面白かった。その後で日本の七夕がどんなものかを話し合ったけど、私は正直言ってはっきり覚えていなかった。自分が本当に恥ずかしかった。それは、なんとなく知っていたものだった。この“なんとなく”を今もとても後悔しているN-5」中国人学生は、日本に来て聞きなれた現代の若者の言葉も取り入れて、「結婚しようよ」という牛太郎の言葉に「えっ、マジ？」という織女の応答には大爆笑であった。

3-10 韓国の歌、中国の民話

韓国人学生が今流行の韓国の歌を紹介、ハンゲルでみんなで何回も練習した。また、中国人学生が中国の民話を中国語と日本語で暗誦をした。日本にも

韓国にも似たような民話があることを知り、アジアの共通点等を話し合った。

3-11 地域の祭り『博多山笠』について

1年生が担当で、山笠について写真や絵を見せて発表をした。ちょうど山笠の時期で効果的であった。「自分は、初めて自分の足で調べて、そしてそれを発表するということを体験しました。私はこれまで山笠のことについては全然知りませんでした。初めて山笠のことを調べ、こんなに深く博多のことを知り、その歴史や風習、伝統料理があったことに吃驚しました。発表の資料のために、博多資料館に行ったり、博多織をしている所へ行ったりしました。そこで博多織をしているおじさんと仲良くなり、今度、博多織を教えてもらう約束もしました。思いもよらない出会いができたのもワークショップのおかげです N-10」

3-12 ワークショップ修了お茶会と各国の歌と花火大会の予告

最終回には、それまでに一緒に歌った各国の歌：『HAKUNAMATATA』（アフリカ）、『如果感到幸福你就拍拍手』（中国）、『アリラン』（韓国）、『SAKURA ドロップス』（日本）をその国の言語で全員で歌ってお茶会を持ちワークショップを修了した。

花火大会企画者より日本人学生の自宅に一泊して、浴衣を来て花火大会へ行くという日程の予告がなされた。次は非常に引っ込み思案な学生で、ワークショップではほとんど喋らなかったが、全回無欠席の1年生のコメントである。「中国人の R-1さんだけでなく、日本人にも知り合いができました。3年生や2年生の先輩とも喋ったりすることができました。N-3先輩やN-4先輩と知り合えたことも大きな出会いとなりました。こんな風に異文化のことについて学んだだけでなく、それ以上によい経験ができました。ワークショップで自分は少し成長したと思います。引っ込み思案が少し治りました。R-1さんや先輩たちのつながりをワークショップが終わったからそれで“バイバイ”ではなくて続けていきたいと思います N-10」

4. 活動を通して観察された学生の意識の変化

ワークショップは、前期15回と限られており、なるべく多くの活動を盛り込んだため、最後にクラス全体でのフィードバックの時間が持てなかった。全体での話し合いができれば、活動についても発展した意見が出てきたかもしれない。修了レポートの課題でワークショップについてのコメントは出たが、レポートだけでは、クラス全員の意見を知ることができなかったのは残念であった。

日本人学生は、最初は勇気がなく、なかなか自分から積極的に交わろうとしない。外国人留学生の積極性と日本語の流暢さに感心して少しずつ自己開示されていくのが観察された。日本人学生の全員が感じたことは、外国人留学生が自分の国を上手に紹介する態度に、自分は果たして日本のことを彼女らのように自信持って話すことができるだろうか、という反省に始まり、次に留学生が日本のことまでよく知っているのに驚き、あまりにも自分の国のことを知らないということに気づき恥ずかしいと思ったことである。このことは1年生の次のコメントに代表されている。少し長いが要所を引用する。「私はこの大学に入学するまで、どこか異文化やその国の人々と接することを拒んでいた。他国の言葉を耳にすると、その言葉で会話している人を盗み見るような感じで、半ばびくびくしながら見ていた。だが、そんな私がこのワークショップで変わることができた。まず、びっくりしたことは、中国や韓国の人たちがとても積極的だったことである。出会った瞬間からすぐに会話が始まり、みながすぐに友達になった。私はここで新しい人との接し方を学んだ。そして、中国・韓国の人とは日本人に比べて外交的だと思った。これからはもっと積極的に自ら進んで生きたいと思う。とにかく、私はこの授業で変わったと思う。日常の大学の会話でも、横から英語や中国語が聞こえてきても物怖じしなくなった。逆に何を言っているのかを知りたくなる N-8」
「ものの見方がひとつ変わると今まで見えてこなかったいろいろなものが見えるようになる。そう実感した。私が異文化を持つ人に対して物怖じしなく

なったのは、その人たちを集団として見るのではなく、個人として見るようになったからだと思う。かたくなに拒否するのではなく、一人の人間として向かい合えば、お互いを理解することができる。それに私は、今では異文化とは何だろうと思う。確かに国によって、生活様式や宗教などは異なる。しかし、私たち人間は変わらない部分の方が多いのではないか。“異”の部分は私たちの中でただ大げさに取り上げられているだけで、本当はそんなに違わない。他の国の人と個人として接してそう思った。実際にワークショップの授業でも、各人の国の文化を紹介し合ったが、異なる点よりも共通する点の方が多かった。一番異なるのは言葉だけなのだN-8」この同じ学生は自分が変わったもう一つの点として、ニュースをよく見るようになったことをあげている。日本のニュースだけでなく、外国のニュースにも関心を持つようになり、狭い考えでは多くのものを見ることができないと言っている。「留学生は輝いている」ことをあげ、それは彼らが苦勞を乗り越え、強い意志を持って日本に留学してきたからだろうと述べている。

以上の学生のコメントや感想は、教壇に立って講義で述べようとしたことを、教員の言葉からではなく、学生自らが自力で学び取ったものである。これは、他から伝え聞いたものではなく、学生自身がワークショップを通して自ら体験し、会得したものである。最近の日本語教育では、学習者の多様性の対応として自立学習支援が注目されている。「学習するのは学習者自身である」という立場から学習者自身が自らの学習に積極的に関わっていくことを奨励するものである。自立学習支援の意味では、ワークショップはその目的を果たしたとすることができ、今後も教育的な効果が期待されるのではないだろうか。本論では、学生の言葉を多く引用したが、学生の言葉そのものが何よりも貴重だと感じるからである。彼女らの発した言葉は、彼女ら自身が体験し、その身体からまた心から滲み出てきた実感であり、自力で学び取ったものである。

学生の意識の変化、それは明らかに意識の向上と言えると思うが、には次の3つのタイプが観察された。

異文化理解における日本人学生と留学生の意識（栗山）

- 1, 外への気づき：異文化に対する知識を得たこと、つまり自分が知らなかった外国の諸事情を学んだことに目が開けた。
- 2, 内なる気づき：自分は自国の文化や事情などを知らない。何も知らない自分を発見して恥ずかしく思った。
- 3, 意識の改革：活動の中で興味をもったことを、もっと掘り下げて調べたいと思い、自分なりのテーマを見つけた。これからグローバルな目を持ち新聞のニュースなどに注意するようになった。

上記3つのタイプは意識向上の3つのステップとも考えられる。

- 1 段階：外国人留学生が自国のことについて日本語で堂々と発表したことで、外国の事情を学んだ。
- 2 段階：果たして自分は彼女らのように自国のことを、しかも第二言語で発表できるか自問自答をしたが、自分は何もできない、第二言語も十分に話せない。
- 3 段階：これからの国際化の中で同じ世代の外国人の若者と伍していくためには、自己意識の変革をし、世界に目を開くことが大切である。そのためには、毎日の新聞に目を通し、同時に語学力をつけなければならない。

今回のワークショップでは外国人留学生よりも、日本人学生の方が知的、精神的なインパクトを体験したようである。外国人留学生は日本の大学に入学したということ自体が、まず大きな感動である。希望に胸を膨らませて長いことの夢が果たせたわけである。「勉強に対する熱意が留学生と自分とはかけ離れている。語学に関しても彼女らの日本語能力は、その努力の賜物である。何年間も習っている英語が話せないのは、自分の熱意が足りなかったからだN-2」と彼女らの日本語での発表や劇を見て感じている。留学生の目的は日本の大学で勉強することであるから、学びたいことを学んでいればそれで第一の目的は果たせたわけである。勿論、今回のワークショップでは日本人学生と交流ができて、しかも日本文化の一部である着物、日本料理、お祭り、花火大会等に触れることができたのは一般の教科の中では学べないこ

とであり、留学生にとっては大きな収穫であった。ワークショップでできた友達とこれからの大学生活の中でもっと深く自由に交流していき、お互いに学びあっていくことができれば、そしてこのワークショップがその発端となることができれば実施した価値があると思う。

留学生は日本人の学生が毎日どのくらい勉強に時間をかけているのか疑問に思っている。ほとんどの留学生は授業が終わると残りの時間はアルバイトに費やしている。日本人と対等に付き合い交わることができるのは大学生活においてである。R-13はアルバイト先での若者の男女交際を見て日本人すべてがそうであるかと思ったが、それはある一部の人たちであることが分かった。一旦友達になれば、さまざまな文化摩擦や疑問に対しても助言を得たり相談したりもできる。心を割って話し合える友達ができれば、個人としてお互いに認め合い「共に生きる」ことになる。積極的に友達を作ることの不得手な日本人学生、異なるものにびくびくしている学生、引っ込み思案な学生たちが共同作業をして食を共にすることによって自然に必要な会話で交流ができる。「異文化」というタイトルも、実は交わってみれば皆同じ人間で、異なるのは国や言葉であり、個人の問題ではないを実感してほしかった。

5. まとめ

自らの判断と強い決意をもって留学を目指し、たゆまぬ努力の末に、望むところの日本留学を実現させた留学生である。しかし、現実の日本社会に身を置いてみると、日々異文化を意識せずにはいられないのは当然である。このような留学生に比べれば、自文化の中で安閑と暮らしている大多数の日本人学生の異文化に対する問題意識や関心は非常に低い。これまでは、受け入れ側のマジョリティーである日本人が、留学生の異文化への適応をどのように促進するかという問題にその焦点が当てられてきたと言える。しかし、現状では、マイノリティーである留学生の積極性と能力を持ち合わせた活力が、いかに日本人学生の意識を向上させ、異文化への関心を喚起するに十分にて

余りあるかということが分かった。留学生の積極性に感動した日本人学生が自己に目覚め、さまざまなことを学び、自己開眼ができたとしたら、留学生は日本人学生の意識の向上と異文化意識の成長を助けたことになる。こういう日本人学生が一人でも多く留学生と共に学び交われば、このことは翻って留学生にとっても大きな収穫である。つまり、一方的な文化の適応、または、同化に好都合な方策を編み出すのではなく、異文化との相互作用による双方向的な学びの場の実現が可能になる。

R-1は国際交流に関して中国と日本との違いを述べている。日本の国際交流は、ほとんどが民間、団体、組織によるものであり、中国には全くそういう組織的なものはなく、ほとんどが積極的な個人による交流だということである。「中国の国際交流は日本の国際交流とは違って、それは私的な交流である。後者のメリットは多くのことを広く、しかも効果的に学べるが、一時的である。一方、前者は深く長く続くが、範囲が狭く一部の者に限られている R-1」というコメントは面白い。

15年間も日本に住み、大学で国際経済を教えるスリランカ出身のN氏は、日本社会の実情を「ガイジンならおいしい酒をただで飲める国際交流パーティーが盛んだが、日常生活は『外国人お断り社会』である」（2002年9月22日朝日新聞）と批判している。対人関係に対していささか臆病で即戦力を伴わず、非積極的な日本人に対しては、大学や民間団体が組織的なものを準備してやることは必要かもしれない。しかし、それをいわゆる民間団体や組織の一過性の自己満足的パフォーマンスに終わらせてはいけない。

このワークショップでは、「21世紀の教育目標」とも言える、学生自身が自ら学ぶ自律学習を目指したが、その目的は一応達成されたと言ってよい。ただ、ワークショップでは、一緒に餃子を作ったり、歌を歌ったりして楽しかった、面白かった、また、異文化にも接し、自己をみつめ直し、学ぶことが多かったということだけで終わってはいけない。各学生がそれぞれの体験を生かし、感動し学び得たことを発端として、各個人を尊重した個人レベルでの交流が今後続いていくことこそが重要なのであり、真の目標だからであ

る。この目標をいかに持続させ発展させていくかということは今後の課題である。今回のワークショップを出発点とした双方向性の発展を期待したい。

謝 辞

今回のワークショップ実施にあたり、専門的な指導をお願いしたが、ボランティアでこころよくお引き受けくださった西田圭子先生（料理指導）、中島久美子さん（着物着付け指導）、松尾毅さん（国際交流）に紙上をかりて深く感謝を申し上げたい。

参考文献

1. 中野民夫 2001『ワークショップー新しい学びと創造の場ー』岩波新書
2. 八代京子他 1998『異文化トレーニング』三修社
3. 異文化間教育学会 2001『異文化間教育 15』アカデミア出版会
4. 同上 2002『異文化間教育 16』